資料渉猟余話 その33

黄眠先生が行く 6

三丁目の兵君

嶋　不濁

日夏耿之介の日記や随筆にしばしば登場する「兵君」なる人物が気になっていた。

最初に気になったのが「山荘日記」。昭和15年8月21日「知久町三丁目の兵君来訪。（中略）十八日の愛宕の西瓜祭は推想の如く、兵君の発意の由。お守りと由来がきをくれる」とある。

ここで読み取れる情報は、この人物が「知久町三丁目」（ここは日夏の生家のあったところ）に住居があるらしいこと。記述に「西瓜祭」とあるので、遡ってみると8月18日の同日記に「今夜あたごの西瓜祭。六十年目の復活の由。大焼字樽みこしもある由。たまには佳いことだ」と、どうも「兵君」は（日夏生家樋口家が代々神官を務める）愛宕神社の氏子らしいことがわかる。

さらに8月27日「朝起きてみれば、南雪嶺山脈黒碧にくつきりと峙ちて美し。昨日兵君より送りこせる虚空蔵山より見る雪嶺見取図をとり出して較べみる」とあり、ここでも「兵君」が登場する。今で言えば、町づくりや歴史／文化に関心のある人物のようだ。

「兵君」の場合もそうだが、日夏は略称や号、果ては地名なども自身で命名して使うので、親しい人にはわかるが普通の読者はわかったようでいてわからない。

この「兵君」は「栗里亭記」にも登場する。「栗里亭記」は避暑ではなく戦時疎開である。山本村の栗里亭の「林中生活」入る2週間ばかり前、昭和20年6月22日午後2時近く飯田駅に着いた日夏は級友（奥村）梨瓶子の口利きで、渋る蕉梧堂に荷を解き、真っ先に訪問したのが級友畊雨子と板兵子である。この「板兵子」がどうも「兵君」のようである。時節柄、宿では昼食を出さないので日夏は「日々午食を算めて友人知己を攻む」ように、飯田の町を彷徨するのである。この攻撃に会うのが、小学校の同級生や旧僕だった。

さらに戦後の昭和21年9月に地元姫城書院で出版した『随筆　山居読書人』の出版記念会の写真の中に発見した。日夏夫人添の横に座る人物に原彰一が「板信伊藤兵三」の説明（「伊那」753号）を付けていてくれた。さらに「伊那」（867号）口絵に、頬杖をつく鳥居龍蔵の左下、ハンチングの和服姿の伊藤を発見した。写真は大正10年5月。兵君が日夏と同年だとすればちょうど30歳くらいになる。宮澤恒之（つねし）の解説によれば「後に飯田市立図書館長になられた」「伊藤兵三」とある。「板信」という足袋商で元結なども扱った。伊藤収一『彼の時彼の人』収載「板信の人々」には憲政会の代議士だった樋口龍峡の選挙の会計役などをつとめ、「学者賢人君子との交りを得て後に知恵伊豆と呼ばれ」、昭和24年3月26日63歳で亡くなったとある。おそらく図書館長在職中であったのだろう、当時、図書館への多額な資金寄贈が話題になった。飯田文化財の会編『伊那谷郷土誌家畧伝』にも取り上げられている。

『随筆山居読書人』出版記念会（昭和21年11月1日）